

第十篇 地形

一

孫子は言う。地形には、通というものがあり、掛というものがあり、支というものがあり、狭隘なものがあり、険しいものがあり、遠いものがある。

平坦で道路網が発達し、我も往くことができ、敵も来ることができ、通の地形では、敵よりも先に高くて見晴らしの良い場所を陣取り、要害を後ろにあて、峰々に陣城を構えて糧道確保しながら戦えば有利である。前が広く後ろに山川や険阻が迫り、往くのは易しいが引き返すのが難しいのを「掛」という。掛の地形では、敵がまだ陣を構えていなければ、進んでこれを討てば勝てる。もしも敵がすでに備えているならば、これを討とうと前に出れば、勝てないばかりか、引き返そうにも逆に敵に包囲されて不利である。我の進出も不利、敵の進出も不利で、どちらも守備を固めるのを「支」という。支の地形では、先にこれを越えた方が負けるので、敵が利益をちらつかせて引出そうとしても出向いてはならない。速やかに引き退き、敵がこれに追い討ちをかけ、その半分が越えて出たのを反撃すれば有利である。

両側の山がせまった谷間などの狭隘な地形では、我が先に進出したならば、必ずそこに兵士を集めて陣を設け、敵が来るのを待つ。もしも敵が先に陣取って、兵を集めて配置していれば、敵が我を引き込もうとしてもそこを攻めてはならず、もしも敵がまだ十分に集まっていなければ、これに乗じて攻めかかれ。天然の要害などの険しい地形では、我が先に占領したならば、必ず高くて見晴らしの良い場所に居て、敵が来るのを待て。もしも敵が先に陣取っていれば、軍を引いて立ち去り、敵の誘いに乗って攻めかかってはならない。敵と我が遠く隔たっていれば、出向いて戦う側が長い道のりに疲れて力を発揮できないので、両軍の兵力が均等であれば戦いを挑むのは難しく、また不利である。

これら六つのことは、地形に応じて兵を用いる上での道理(地の道)である。将軍が知っておくべき最大の責務なので、必ず考察しなければならぬ。

二

そこで、兵には戦わずして逃げる者があり、弛む者があり、陥る者があり、崩れる者があり、乱れる者があり、敗れて逃げる者がある。これら六つは天地についての災いではなく、将軍の統率上の過ちである。

そもそも兵士の能力や兵器の性能がどちらも等しいときに十倍の敵を攻撃すれば、戦いを待つことなく兵を逃亡させることになる。兵士たちは強くても幹部が弱ければ、軍紀を弛ませることになる。幹部は勇猛であつても兵士が弱ければ、落とし穴に陥つたように幹部だけが敵中に孤立することになる。部将が怒つて総大将たる將軍の命令に服従せず、敵に遭遇しても將軍への怨み心から自分勝手に戦い、將軍もその部将がどの程度の能力かを知らないような状態を崩れているという。將軍が柔弱で威厳がなく、平素から正しいことを教えないので、兵士の起居容儀や幹部の作法にも定まつたものが無く、陣立ても縦横にバラバラな状態を乱れているという。將軍が敵の衆寡強弱を推察できず、小勢で大敵と戦い、弱兵で強敵を攻め、武勇に勝る兵士を選りすぐつて先手とすることもなければ、戦いに敗れて逃げることになる。

これら六つのことは、軍に敗北をもたらす道理（敗の道）である。將軍が知っておくべき最大の責務なので、必ず考察しなければならぬ。

三

そもそも地形というものは補助手段に過ぎず、これだけで必ず勝るといふものではない。敵の衆寡強弱を十分に推察して、こうすれば

必ず勝てるという道筋を詳しく立て、しかる後に山の険しさ、隘路の危うさ、道路の遠近といった地形について、敵と我との利・不利を考察するのが総大将たる将軍のなすべきこと（上将の道）である。これらをわきまえて戦いを始めれば必ず勝つが、これらを知らずに戦いを始めれば必ず敗れる。

そこで、戦いの道理から必ず勝ると判断したならば、主君が戦つてはならないと言つても、必ずや戦うのが良い。逆に戦いの道理から勝てないと判断したならば、主君が必ず戦えと言つても、戦わなくてよい。だから、進むにしても功名を求めめるのではなく、退くにしても君命違反の罪を恐れることなく、ただ兵士の命を預かる者として損害を最小限にすることで、結局は主君にも利益をもたらす。このような将軍を国の宝というのである。

将軍が兵士を使うには、ものごとを知らない幼子のように、どのような命令にも疑念を持たせず、進むも退くもすべて将軍の思うままにする。こうすれば、その先にどんな危険があるかもわからない深い谷へも共に行けるようになる。将軍が兵士をわが子のように深い愛情で接すれば、兵士も将軍を父親のように慕って命の危険さえもいとわなくなる。しかし、深い愛情で接するだけで教練したり命令したりせず、ねんごろに養うだけで与えた仕事をきちんとさせず、規律が乱れてい

でもそれを正さなければ、苦勞を知らないわがまま息子のように、兵たちも戦の用に立たなくなる。

四

我が兵士らが教練に習熟し、上下同心で、敵を攻撃できる実力があることは分かっている、敵も十分に強いので攻撃すべきではないということを知らなければ、勝つことも負けることもある。敵が弱く備えも不十分なので攻撃すべきであると知り、我が兵士にも敵を攻撃する十分な実力があると分かっている、地形上はここで戦うべきではないということを知らなければ、勝つとしても多くの死傷者を出すかもしれない。

それゆえ兵法を熟知した人は、いかなる行動にも迷いがなく、兵の用法も窮まることがない。なぜならば、敵のことを知り、我のことも知っている、勝利が危うくなることなく、さらに天候・気象を知り、地形についても知っている、多くの兵士を戦死させずに完全な勝利を得られるからである。